

ENTSORGA-ENTECO2009(リサイクル環境技術国際見本市)レポート



10月27日から28日まで、ドイツ・ケルンでENTSORGA-ENTECO2009(The International Trade Fair for Recycling Management and Environmental Technology・リサイクル環境技術国際見本市)が開催されました。本見本市は3年に1度開催され、前回(2006年)は910の展示企業・団体が出展し、110カ国から4万人以上が見学に訪れました。

会場のケルン見本市会場(Koelnmesse)は、世界遺産として有名なケルン大聖堂のある旧市街地から程近いライン川で隔たった振興開発地にあり、本見本市はそのうちの5区画

91,200平方メートルで開催されました。

身近なリサイクル・環境技術といえば、ごみ処理が真っ先に思い浮かぶところ。ドイツのゴミ分別回収が徹底していることは有名です。ベルリンとハンプルグの清掃局が出展し、事業成果・統計資料を満載した分厚い冊子を配布しました。写真はベルリン清掃局BSRの会場。



リサイクル技術ではまず廃棄物を圧縮小型化し、低コストで運搬処理する必要があります。ゴミが出たその地点で低コスト化のための処理が行われることが理想です。工作機械、車はもちろん生活用品に至るまで、ドイツの装置モノはたいてい大型堅牢なのですが、ドイツ企業から、車体に裁断・圧縮装置を搭載して回収現場ですぐに処理できるようにした回収車両が各種出展されました。車両と並んで展示物として目立ったのは、女性や子供でもボタン一つで安全に扱える段ボールなどの小型圧縮機。ゴミを出す事業者・家庭・地域が最初の処理者として活動する必要性を感じます。設備や人件費の確保が課題です。

時流を反映して、電池、貴金属の回収に用いられる技術も紹介されました。日本人の参加も多く、会場のあちこちで日本語が漏れ聞こえていました。

JETRO主催の講演会では、日本の焼却炉メーカーによって、間伐材焼却で暖房用電力を取り出すクリーン発電技術が紹介されました。このメーカーの創始者である田熊常吉は戦前の日本十大発明家の一人といわれ、材木商として神戸

と木材産地の和歌山を行き来していたところに「田熊式ボイラー」の着想を得たといわれます。この技術が大きな注目を得たのは奇しくも今から80年前の1929年10月に東京で開かれた万国工業会議。発明から100年たった今、北ヨーロッパの立派な焼却場でこのボイラーの子孫がふたたび罐に木材を入れて働いているのです。